

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

語彙をめぐって：  
年齢差のグラフに見られる変化のパターン

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 水野, 義道 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00002893">https://doi.org/10.15084/00002893</a>

## 2. 語彙をめぐって

— 年令差のグラフに見られる変化のパターン —

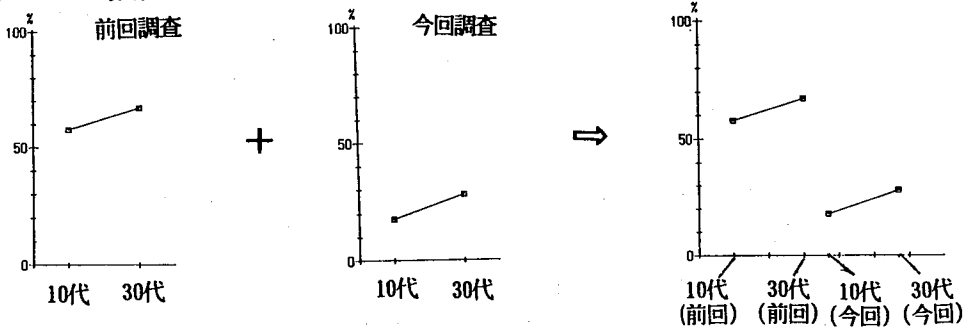
日本語教育センター第四研究室  
水野 義道

### 0. はじめに

本発表では、前回富良野調査（前回調査）の結果と、今回の富良野パネル調査（今回調査）の結果を比較することによって、27年間の変化とそのパターンについて考察したい。さらに富良野継続調査（ランダム調査）の結果を今回の富良野パネル調査の結果に重ねあわせることによって、1986年当時の富良野の言語状況をより詳しく観察し、あわせて語彙使用の変化について考える材料としたい。

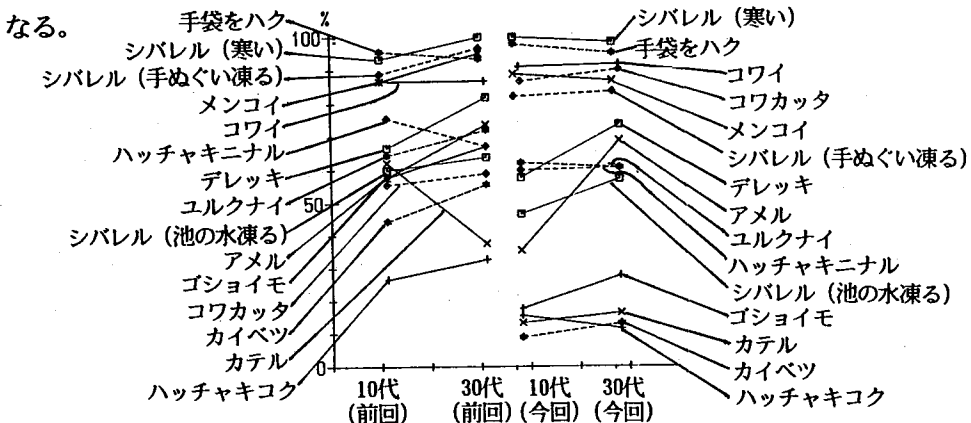
### 1. 富良野における27年間（1959年→1986年）の変化とそのパターン

前回調査と今回調査を、年令差とのかかわりで比較することにする。下の図のように、本来二つの時点における二枚の別々の図を一枚の図に合成して示すこととする。



（図1：富良野における27年間の語彙使用の変化を表わす図の示し方）

上記の三つの調査に共通する語彙項目について、上に示した図を書くと、図2のようになる。



それぞれの語を「使う」

（図2：富良野における27年間の語彙使用の変化）

図2から次のようなことがわかる。

(1) 前回調査で、「使う」が80%以上で安定していたものは、今回調査でも80%以上で安定している。(シバレルー冬ひどく寒いことー、手袋をハク、コワイー疲れた・くたびれたー、メンコイーかわいいー、シバレルー濡れた手ぬぐいが寒さでカチカチになるー)

(2) 前回調査で40~80%の範囲にあったものは次の3種類に分けることができる。

①「使う」の率が下がったもの

③今回調査でも40~80%の範囲にあるもの(デレッキー火かき棒ー、ユルクナイー楽でない、苦労だー、ハッチャキニナルー一生懸命になる、思いきりがんばるー、シバレルー池の水が寒さのために氷になるー、アメルーごはんなど、物が腐る、いたむー)

⑥今回調査では30%以下になっているもの(ゴショイモーじゃがいもー、カテルー仲間に入れる、加えるー、カイベツーキャベツー)

②「使う」の率が上がったもの(コワカッター疲れた、くたびれたー)

上記の変化のパターンをパターン別に図で示せば、図3-1~3-4のようになる。

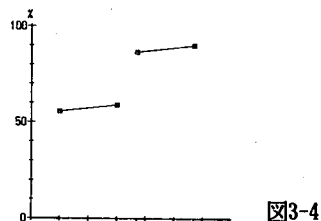
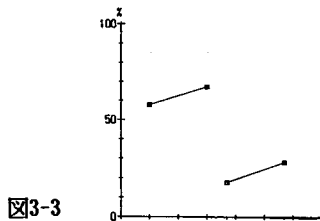
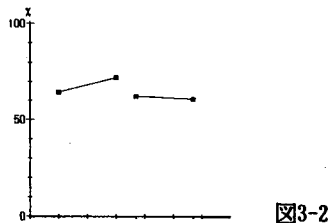
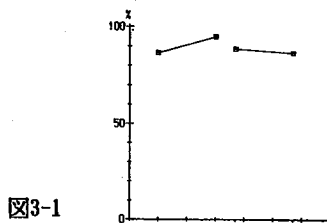


図3-1は、上記の(1)を代表し、以下同様に、図3-2は(2)①③を、図3-3は(2)①⑥を、図3-4は(2)②を代表している。これらは調査の結果から抽出した変化の主なパターンであるが、以下ではこれらをその他の可能な変化のパターンと関係づけて考えてみることにする。

## 2. 語彙使用の変化のパターン

図2は、前回と今回の調査の結果を、それぞれ1959年当時の10代のグループと30代のグループとに分け、「使う」と答えた人のそれぞれのグループ全体における比率を表わしたものである。つまり、調査結果を、それを答えた人の年齢軸上の二つのグループに分けて

示し、全体の使用状況を年齢軸の観点からとらえようとしたものである。ところで、これはこの調査で回答を得た個々人のことばの使用意識の集積である。そこで、語彙使用の変化の二つの側面として、個人と社会全体とを考える。この二つの側面のそれぞれが変化するかしないかによって、表1に示すような四つの場合を考えることができる。

	A	B	C	D
個人	-	+	-	+
社会全体	-	-	+	+

表1：語彙使用の変化のパターン（「+」は「変化する」、「-」は「変化しない」を表わす）

Aは、個人も社会全体も変化しない場合である。例えば、図4-Aに示すように、社会の成員全員がそのことばを使い、その状態が何十年かたっても変わらないという場合が考えられる。（ここでは言語能力の完成した個人、およびそのような個人によって構成される社会を想定して考えており、言語能力の発達の顕著な子どもについては、考察の対象からはずす結果になっている。以下同様）

Bは、個人は変化するが、社会全体としてのそのことばの使用状態は変化しないという場合である。例えば、図4-Bに示すような場合で、年をとるにつれてその人の使うことばは変化するが、その人が20年後に使うことばは、現在その人より20歳年上の人を使っていることばであり、社会全体としてのそのことばの使用状態は変化しないというものである。

Cは、個人は変化しないが、社会全体の使用状態は変化するという場合である。例えば図4-Cに示すような場合で、どの個人をとってみてもその人のことばの使用状態は何十年かたっても全く変わらないのであるが、Aとは違い、もともと使用率に年齢差があるために、人が年をとることによって社会全体としてのそのことばの使用状態が変化するというものである。

Dは、個人も社会全体も変化する場合である。例えば、図4-D-1のように、全員が使用していたあることばが何十年かのちには全く使用されなくなったというような場合、図4-D-2のように、ある時点では、年令の高い人のほうが年令の低い人より使用率が高かったが、何十年かののちにはその使用率が逆転してしまった場合、図4-D-3のように、年令の高い人と低い人との使用率の違いの関係は変わらなかったが、何十年かたつうちに全体的に使用率が下がった場合などが考えられる。

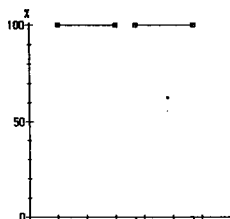


図4-A

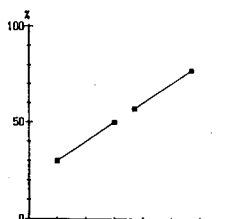


図4-B

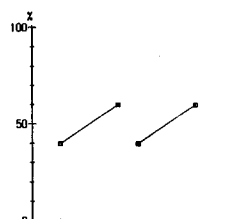


図4-C

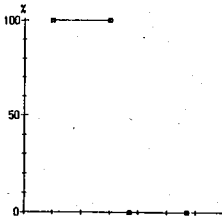


図4-D-1

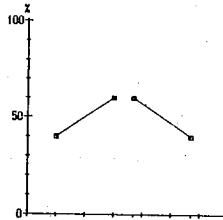


図4-D-2

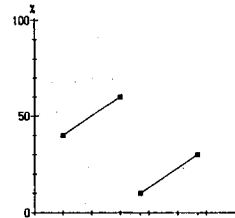


図4-D-3

以上を総合すると、次のように考えられる。

- (1) Aのパターンは、安定して使用される多くのことばにあてはまると考えられる。図3-1に示した変化のパターンをもつことばは、おおむねこのAのパターンに沿っていると考えられる。しかし、純粋なAのパターンではなく、Dのパターンが少し入っている。
- (2) 調査の結果実際にあらわれたパターンの多くは、Dのパターンに属するものである。Dのパターンから考えれば、その極端な場合（個人または社会全体のどちらか一方が変化しない場合）がB、Cのパターンであると考えられる。

### 3. 年令差のグラフの解釈と実際の変化

1、2では、27年の時間を隔てて同一人物に質問して得た回答にもとづいて、語彙使用の変化のパターンについて考えた。このなかで、前回調査で「使う」の率が40～80%の範囲にあったものは、27年間の変化のパターンという点から三つのグループに分けられることがわかった。では、前回調査の結果だけから、このような変化を予測することができるだろうか。この点について考えるために、前回調査の結果の年令差のグラフが似ていて、しかも今回調査の結果が大きく異なる四つの語（ゴジョイモ、アメル、ユルクナイ、コワカッタ）について考えることにする。図1に示した方法で書いた図にランダム調査の結果の年令差のグラフを重ねて示すことにする。

図5-1～5-4を見ると、前回調査の結果はいずれも50～80%の範囲におさまっていて、しかも全てやや右あがりであり、大きな違いは認められない。一方、今回調査の結果は、図からわかるようにそれぞれかなり異なっている。今回調査とランダム調査の結果はおおむね合致している。ランダム調査の結果を参照すると、アメルは20歳代、10歳代に向かって使用率が著しく低下しており、ユルクナイとは大きく異なっている。社会全体としてのアメルの使用率は、今後さらに低下していくことが予想される。一方、ユルクナイは今後もかなりの程度用いられるであろうと思われる。コワカッタは、前回調査で80%以上の使用率を示したコワイとの関連を考える必要があるであろう。この調査結果を見るかぎりでは、コワイがコワカッタの使用率を引き上げたように見える。ランダム調査の結果を参照すれば、コワカッタは使用率が高く安定した状態に入っており、今後かなり長期間にわたって、安定して用いられるであろうと予想される。

「使う」の率の男女差を計算してみると、コワ Катт (17.6%) > ゴシヨイモ (8.5%) > ユルクナイ (4.2%) > アメル (0.6%) の順になっている。偶然かもしれないが、27年間の変化の大きかったものは、前回調査の時点での男女差が大きかったという傾向がある。

年令差 (前回調査の10代と30代の差) を計算すると、アメル (16%) > ゴシヨイモ (9.4%) > ユルクナイ (7.7%) > コワ Катт (3.4%) となっている。この数字と変化の大きさとを関連づけることは難しいと思われる。ただアメルは、「使う」の年令差が大きいことのほかに「知らない」の回答が、10代 (15.6%) > 30代 (1.6%) となっており、これらの回答の特徴がその後年令差がさらに大きくなることを暗示していたと考えられなくもない。

ゴシヨイモを「使う」

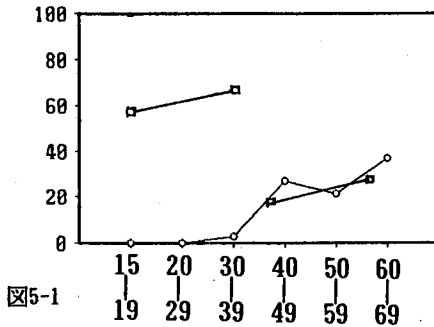


図5-1

アメルを「使う」

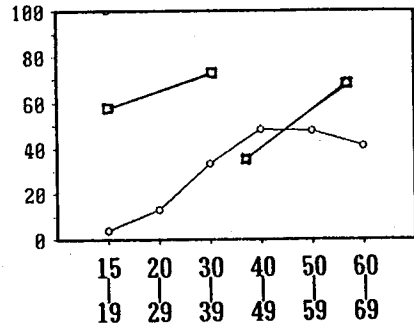


図5-2

ユルクナイを「使う」

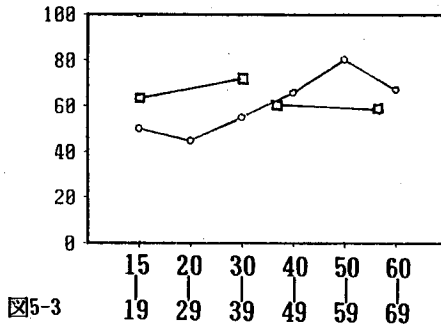


図5-3

コワ Каттを「使う」

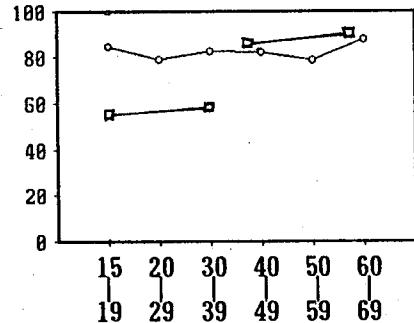


図5-4

男女差、年令差は、いずれもその後の変化を予測するうえでの決め手とはならないようである。しかし、男女差は、ないものよりあるものの方がその後の変化が大きい可能性が高いとは言えるかもしれない。また、年令差にしても、年令差が特に大きければその後の変化は大きい可能性が高いであろう。しかし、ゴシヨイモの変化に見るように、年令差は小さくても大きな変化は起こるのである。

次に、語の性格によって変化の傾向があるかないかを考えてみよう。図2に示した語を品詞と大まかな意味によって分類すると次のようになる。

名詞：ゴシヨイモ、カイバツ……農作物

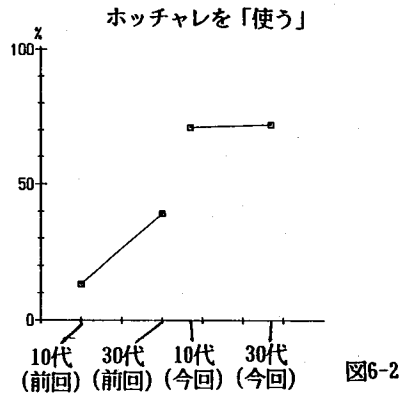
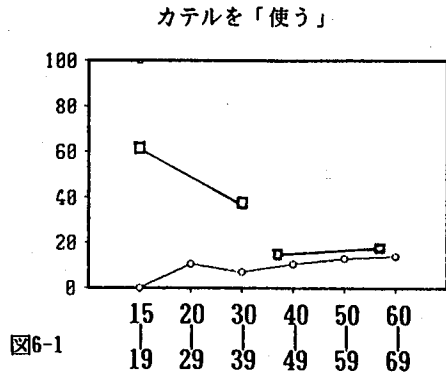
デレッキ ……生活用具

形容詞：メンコイ、ユルクナイ、コワイ、コワ Катт……状態

動詞：シバレル（寒いこと）……状態  
 シバレル（凍ること）、アメル……状態の変化  
 ハク、ハッチャキニナル、ハッチャキコク、カテル……動作

これらの語だけの範囲では、方言語形について次のようなことが言えるだろう。状態を表わす形容詞、動詞は使用率がもっとも高く、安定しており、状態の変化を表わす動詞がそれに次いで使用率が高い。動作を表わす動詞の中には使用率が高く、安定しているものもあるが、使用率の低下しているものもある。名詞、特に農作物を表わす語の使用率は低下が著しい。

しかし、上に述べたことは、これらの語がこのように変化したという事実に過ぎず、これらから一般的な法則を求めてほかの語彙にあてはめることは危険である。最後に、実際の変化が一般的な予想とは異なるのではないかと思われる例を二つあげて、その意味を考えてみよう。



カテルは、前回調査で10代(62.2%) > 30代(37.7%) と年令の低い世代のほうが年令の高い世代より顕著に高い比率で用いていたのに、27年後には30代(16.4%) > 10代(13.3%) と10代の使用率が著しく減少し全体としても使用率はかなり低くなっている。カテルについては、ランダム調査で関連語形「カセル」「カゼル」についても別々に調査しており、その結果を見ると「使う」の率は全体としてそれほど高くないが(最高でも30%未満)、相対的に年令の高いほうから低いほうにむかって、カテル > カゼル > カセルと変化しているようである。このように関連語形がある場合には、関連語形を考慮に入れないとその語の全体的な変化の方向を予測することはできない。

ホッチャレは、前回調査では、30代(39.3%) > 10代(13.3%) と年令の高いほうから低いほうに向かって使用率が激減しており、この語形はその後使用率が低下する方向で変化するだろうと思われるような結果となっている。しかし、実際には、27年後の「使う」の率は30代(72.1%) > 10代(71.1%) と年令差はほとんどなくなり、使用率は激増している。ホッチャレは、本来「放卵、放精後のサケ」を表わす語であるが、転じて「疲れて元気のない人」の意味も表わす。このように転義を獲得するに至った方言語形は、その表現効果の高さのゆえに使用率の低下がはばまれる、あるいは場合によってはホッチャレのように使用率が上昇する可能性があるということが言えるのではないだろうか。

- 1 予稿集の「年令」の「令」は、「齡」とすべきでした。訂正させていただきます。
- 2 「パネル調査」は、社会調査の方法の一つで、ある辞典には次のように解説されている。

panel 【経営】 a パネル調査（同じ回答者に対し定期的・継続的に特定の調査を行ない、消費者や商品の動きを確かめるマーケティング調査の一方法）。 b パネル（パネル調査の対象として選定される消費者、卸売・小売商などの固定した標本の集団） 『研究社 新英和大辞典』 第5版 1980年

今回の調査では、前回富良野で 200人を対象に行なった調査をパネル調査の第1回とし、今回をその第2回として、前回と同じ 200人をさがし、結果としてそのうちの 106人から回答を得た。本発表で用いているパネル調査のデータは、この 106人から得た回答をもとにしたものである。調査項目は前回と同じ、調査方法も前回とほとんど同じであるが、細部においては異なると思われるところもある。

- 3 本発表で用いた調査結果は次のようなものである。  
例えば、ゴショイモについては、次のように質問して回答を得ている。

101. 《絵》最初は食べものの名前です。このいもを何と言いますか。

zyagaimo gosyoimo nidoimo imo bareisyo

【リスト】 gosyoimoという言い方について、この中からあてはまるものを選んで下さい

- ・ gosyoimo      使 う
- 使った——何歳・いつごろ [                     ]
- 聞 く     ┌
- 聞いた   └— 誰のを [ 祖父母・父母・同世代・子・孫 ]
- 知らない

この質問に対する回答のうち、gosyoimoについて「使う」と答えた人の比率について考察している。

- 4 図1（4頁）、図3-1、3-2、3-3、3-4（5頁）は、それぞれゴショイモ、メンコイ、ユルクナイ、ゴショイモ、コワカッタのグラフである。



5 5頁では、(2)②として「使う」の率が上がったものを取りあげ、その例として「コワカッタ」を挙げている。しかし、その後、前回調査と今回調査の調査票を比較し、調査結果を比較した結果、「コワカッタ」の使用率が上がったように見えるのは、前回と今回の調査目的の違いにもとづく調査法の違いによるものではないかと思うに至った。例えば前回調査の調査票では、「コワカッタ」の項目は次のようになっている。

110. 疲れた・くたびれたという意味で、「コワイ」とか「コワカッタ」と言いますか。

kowai } (使う・使った・聞く・聞いた・知らない)  
 kowakatta }

それに対し今回調査の調査票では、kowai、kowakatta それぞれに対し、上記3に示した形で「使う・使った・…」をたずねている。前回調査の調査票の形式、およびその調査結果を見ると、調査の意図として、「コワイ」か「コワカッタ」のどちらかの使用が確認されればそれでよいと考えていたのではないかと思われる。例えば、上記の調査票で「kowai」と「使う」に○印がついていて「kowakatta」については何の言及もないという場合がある。今回の分析ではこのような場合「kowakatta」は「無回答」として処理している。そのためではないかと思うのだが、「コワカッタ」の「無回答」の率は非常に高い(36.8% → 今回1.9%)。このなかには、今回調査の形式で調査すれば「使う」という回答が得られたものがかかり含まれている可能性があると思われる。

6 6頁2行目「そこで、語彙使用の…」以下は、それ以前の部分と比べると議論に飛躍があり、誤解を受けやすい説明になっている。原因は、突然「個人」をもちだしたところにある。表1の「個人」は、「年齢層別グループ」に変更したい。

	A	B	C	D
年齢層別グループ	-	+	-	+
社会全体	-	-	+	+

表1 (修正)

富良野パネル調査についての考察では、1959年の時点での10代と30代の年齢層別グループを、それぞれ「10代」「30代」と呼んで固定し、27年後の調査においても、それらのグループをそのまま「10代」「30代」と呼んでいる。このときの「10代」「30代」という呼び名は「年下組」「年上組」、あるいは「Aグループ」「Bグループ」と言いかえられるようなものである。そこで、発表では、年下組を「J (unior) グループ」、年上組を「S (enior) グループ」として考えることにする。J<sub>1</sub>、S<sub>1</sub>は1回目の調査時点でのそれぞれのグループであり、J<sub>2</sub>、S<sub>2</sub>は2回目の調査時点でのそれぞれのグループをあらわすものとする。